

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370730

研究課題名(和文) 外国語学習における言語学習観の形成とパブリック・ディスコース

研究課題名(英文) The formulation of learner beliefs on foreign language learning and the role of public discourse

研究代表者

小田 眞幸 (ODA, Masaki)

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：60224242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では外国語学習の動機付けを左右する学習観が学習者の発達段階でどのように形成されて行くのかを通時的な観点から論ずる。学習者が自らの外国語学習を振り返るインタビューの結果、成人マスメディアなどによって形成される言説に影響を受け、学習観を変化させていく事例がより顕著になることが分かった。学習者に継続的に必要な情報を与え、彼らが正しい判断を行うよう援助することが外国語教育従事者の義務である。

研究成果の概要(英文)：This is a diachronic study on learner beliefs which would affect one's degree of motivation at different stages of one's life. An interview was conducted to adult learners who were asked to reflect their experience in language learning. Through a series of interviews, it was found that one's beliefs about learning languages shift consistently. Beliefs about foreign language learning among adult learners are formulated with much influence by the discourse of language teaching/learning prevailed in the society as a 'common knowledge' without principle. The role of foreign language professionals is therefore to constantly provide learners with relevant information in order for them to find the optimal route for learning languages.

研究分野：応用言語学

キーワード：ディスコース 共通知識 言語学習観 ナラティブ マスメディア アカデミア 社会的要因

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は平成 21 年度から 24 年度まで、科学研究費基盤研究(C)「外国語教育政策策定におけるパブリック・ディスコースの役割」(課題番号 21520596)を行った。その成果は別途公開されているが、主な研究成果として、外国語教育政策策定者が教師へ、そして教師が学習者間へ常に影響力を行使し、それが循環的に繰り返され外国語学習の「あるべき」姿が言説として形成されていくことが判明した。そして、政策策定者は政策により教師が「すべき」ことを決定し、教師は教授活動の中で、何を、どう学習者に与えるかを決定する。そして政策策定者たちは「学習者に有利になる」という理由付けで政策を変更したり新たな政策を策定したりする。こうした循環構造(Dyrberg 1997)は言説をより確固たるものにして、より力のあるものにしていくという概要がわかってきた。

## 2. 研究の目的

この結果を受け、本研究は上記の循環構造に中における、学習者の位置づけをより詳しく解明することを目的にスタートをした。外国語に限らず学習活動の中心は学習者である。したがって、外国語学習において、学習者がよい成果を上げるには、どのような「学習」を行えばよいのか、そして、そういった学習活動を促すにはどのような条件が必要であるかを調査するにはどうすればよいかを考えることとした。本研究はあくまでも「応用言語学」の範疇、すなわち「言語学の研究成果をもとに社会における諸問題を解決に導く」(cf. Brown 1987)ことを目的に行うものである。したがって個々のデータを記述し、分析することが主な目標ではなく、それらをもとに上記の「循環構造」の中における、学習者の位置づけと、学習者の行動(学習活動)を変化させる外的要因としてのパブリック・ディスコースの役割を地図のように示し、今後のさらなる大規模の研究への橋渡しとすることが目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 先行研究

まず先行研究として注目したのが Learner beliefs (学習観、ビリーフ)についてのもの、これまでもいくつかの研究がおこなわれている。Mercer (2011)は外国語学習者の学習観が、彼らの行動、動機そして外国語学習に対する態度に大きな影響を与えると述べている。このことを検証すべく、近年外国語の「学習観」を扱った様々な研究が行われている。Amuzie and Winke (2009)は、留学を経験した学生に対し、留学前、留学中、そして後の外国語学習観の変化についてアンケート調査をもとに論じた。その中で特に注目すべき点は、留学を通して、学習観のうち

自律学習に関するものと教師の役割に関するものに変化が見られたということである。また、Yang and Kim (2011)は韓国人学生の留学に伴う外国語学習観の変化について、アンケートに加え本人たちの留学中のインタビューを加え、個々の学生の外国語学習観の変化についてより詳細に調べた。その結果、外国語学習観は外国語の使用目的と言語が使用される社会環境と連動されながら形成されると結論づけている。言い換えれば社会環境に応じて学習者は言語学習の目標を維持したり放棄したりするのである。これらの研究は主として留学という限られた状況におけるものであるが、Peng (2011)は大学に入学したばかりの学生を7か月ほど継続的に観察し、さらに彼らの日記、およびインタビューのデータを分析することにより、前述のYang and Kim (2011)と同様、外国語の学習観が流動的で、状況に応じて新たに発生するものであると結んでいる。

### (2) インタビュー

2013 年度、2014 年度に私立大学に在学する大学生、大学院生 7 名にそれぞれ 40 分から 1 時間程度のインタビューを行った。インタビューは半構造的(Semi-structured)インタビューの形態をとり、協力者が生まれてからインタビューの時点までの言語との接点、言語特に外国語との接点、言語の習得と学習歴、学習の同期、外国語学習観の変遷などについて話してもらい IC レコーダーで録音を行った。通時的な外国語学習歴ならびに学習観の変遷については、理想的には出生時から個々に密着し継続的にデータを取り続けることが好ましいが、現実には不可能であるため、各協力者が振り返り、必要に応じて上記のポイントについての回答を補足してもらうという方法をとった。さらにその後の分析の過程においてデータ内容を再度確認できる協力者にあらかじめ依頼をしておいた。(2014 年 1 月に研究代表者が病気入院のためデータ収集の規模は当初の計画より小さくなったが、前述の先行研究の事例および本研究の目的を考えた場合、データとしては十分であると考えられる)。インタビューデータは適宜書き起こし、本研究の基本データとなった。

### (3) 循環構造の概念化

インタビューデータには当初の想定以上に様々な情報が含まれており、今後のリサーチの無限な可能性を示唆すると同時に、特に言語コミュニケーションの研究を行う際のコンテクスト(Context)の概念を再考する必要性を認識させるものであった。しかしながら本研究の本来の目的である、学習観の形成とそこに影響を与える社会的要因、その中でパブリック・ディスコースの役割の概念化を最優先に考えた場合、インタビュー内での個々の発話を 1 つ 1 つ微視的に分析するのではなく、インタビューを通して語られるそ

それぞれのナラティブ全体をとらえながら、各協力者が認識している学習観の変化の時期、そのきっかけ、さらに変化の要因、特に成人学習者の学習観の形成と社会的要因(Spolsky 1989)との関係を図式化し、今後の研究への足掛かりとすることに重点を置いた。

#### 4. 研究成果

(1) 学習観を形成し、変化させる外的要因  
2013年度に実施した3名のインタビューについては分析を先行させ、Oda (2014)で学習観に変化をもたらす社会的要因(Spolsky 1989 など)について論じた。これらのデータからはそれぞれのユニークな学習歴がうかがわれるが、学習観との関連については3名の間で共通するパターンがいくつか存在することがわかった。1) 学習観は常に変化し続ける、2) 外的要因により学習観に変化が起こることが多い、3) 学習観の形成に影響を与えるのは、就学前は親、就学後は教師であることが多いが、成年になり自ら情報を収集するようになると、マスメディアなどを通じて形成された社会における「共通知識」(Neuman et al. 1992)、そしてそれらをもとに「既定値」となったパブリック・ディスコースに大きく影響されるケースが見られた。4) 3) と関連して、日本特有の現象と思われるが、「大学受験」に合格することに外国語を学習する価値を見出していた場合、大学に入学後、目標を失うケースと、「受験」から解放され、自ら軌道修正を行い、新たな目標が見つかるケースがみられるが、どちらの場合も社会的要因が決定を左右する要因となることが多い。これらのパターンは2014年以降に行った4名分のインタビューの結果にも共通しており、この部分を含んだ内容は2016年度マレーシア英語教育学会の全体講演で発表し、その後論文にまとめる予定である。

#### (2) 学習観の形成の循環構造

本研究では外的要因によって学習観が形成されていく過程そのものについても上記のインタビューデータをもとに解明することができた。これまでの言語学習観に関する研究の多くは、外的要因が学習者を刺激した結果、学習者の態度に変化が生じ、それをもとに学習者が行動し、それが学習成果に直接つながると考えていた。(Yang and Kim 2011, Peng 2011 など)そしてその循環が繰り返されながら、新たな情報そして経験をもとに学習観が見直され、より詳細で確固たるものになっているものと思われる。しかしながら、Navarro and Thornton(2011)が述べているように、特に自律的な学習の場においては、必ずしも外的要因による制約を受けずに済むため、自らの行動そのものがこれまで学習観を振り返り修正して行くケースも見られた。したがって「(言語)学習観」「態度」「行動」の関係は次の図のように示される。

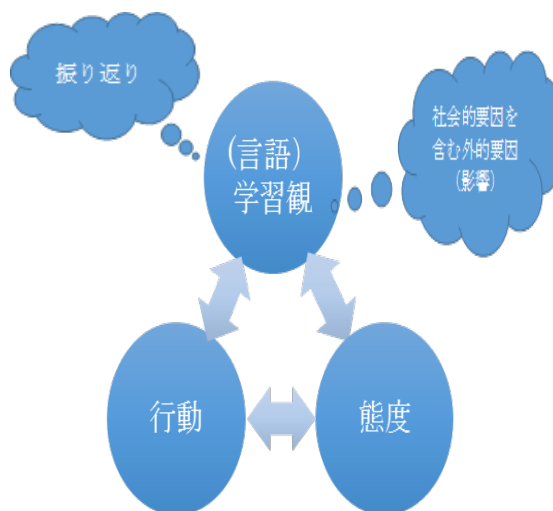


図1 (言語)学習観の形成 (Oda 2014, p.109より)

詳細については更なる調査が必要ではあるが、少なくとも「(言語)学習観」「態度」「行動」の関係が単一方向に一直線に進むものではなく、それぞれが相互に影響を与え合う環状のものであるという考え方の方が今後の「学習観」の研究のフレームワークとして適切であろう。

#### (3) 社会的要因としてのメディア・ディスコース

インタビューの対象であった成人学習者について、特に大学入学以降の学習観の形成について、自分が影響を受けたと思われる外的要因は、それまでの「親」「教師」から「友人」との占める割合が大きくなること、そしてその影響のパターンも、直接的なもの(友人の行動)と間接的なもの(友人、マスメディアやSNSを含む第三者から受けた影響)に分けられる。そして、「受験」という目標を失った大学生が言語(外国語)の学習を継続するかどうかの判断材料として外部から情報を利用することが多いが、インタビューの結果、過去の経験、すなわち外国語学習の方法および外国語学習を行った状況が多様であったほど、情報源の範囲も広いということがわかった。そして情報源が多様であればあるほど、継続的な「振り返り」が可能であり、限られた情報を鵜呑みにせず自らの「(言語)学習観」を形成していけるのである。

インタビューデータを分析する中で学習者の情報源として顕著に表れたものがマスメディア、SNSなどから得る間接的な情報である。大学受験を終えた学習者たちにとって、更に外国語を学び続けるかどうか、そしてどの言語を学ぶかどうかの判断は、この先に「使う」機会があるかどうかのポイントになる。そして、高等学校までと比較してこれら

について自分で判断をする余地がある中、結果的に多くが「英語」を学び続けることにした理由は、自らの体験をもとにして判断をしたのではなく、他の情報へのアクセスがなく、ただ「英語が将来自分にとって有用である」あるいは「英語を学ばなければ困る」というような内容の情報に晒され続けると同時に他からの情報が制限された状態、むしろ他の情報が存在することでさえ知らない状態が続いたことにより、いつの間にか限られた情報を基にした知識が「既定値」になってしまっていると考えてよいだろう。言い換えれば多くの場合こういった状況を当たり前のこととして疑わず、無批判で受け入れてしまっているのである(cf. van Dijk 1996)。

マスコミが流す情報の有効性についても議論しなければならない。ここ数年小学校への英語の授業の導入が叫ばれている。研究代表者が担当する授業において、大学生に早期英語教育の是非について意見を聞いてみたところ、回答は「賛成」と「反対」の両者がほぼ50%ずつであった。そして、それぞれの理由を聞くと、前者については「臨界期までに始めるべきである」、また後者については「英語の学習をあまり小さい時から始めると日本語の発達を妨げる」というものが目立った。しかしながら実際「臨界期」が何なのか、「なぜ外国語の学習が母語の発達に悪影響を与えるのか」などは殆ど説明できず、まずメディアでそのような意見を繰り返し聞くことにより、彼らの「共通知識」(Neuman et al. 1992)となり、それが社会に浸透しパブリック・ディスコースとして定着してしまっている。これは研究代表者の平成21年度から24年度まで、科学研究費基盤研究(C)「外国語教育政策策定におけるパブリック・ディスコースの役割」(課題番号21520596)の結果とも共通しており、当初は想定していなかったものの、インタビューにおいて協力者各自が外国語学習を振り返った際に初めて「自分の選択」以外の「選択肢」の存在に気が付いたという結果とも深く関係があると考えられる。

#### (4) 今後の研究、教育への示唆

本研究の当初からの目的は、外国語教育政策策定者が教師へ、そして教師が学習者間へ常に影響力を行使し、それが循環的に繰り返され外国語学習の「あるべき」姿が言説として形成されていく過程においての学習者の位置づけを、「学習観」に焦点を当てて示すこと、そしてその形成の過程において、パブリック・ディスコースの存在がどう寄与しているかを図式化して示し、今後の研究の基礎とすることであった。結論として1)「学習観」は継続的に変化する。基本的にはそれまでの学習観が新しい情報により継続的に修正されて行くが、本研究で判明した点はそのサイクルが「学習観」>「態度」>「行動」の一

方的な流れではなく、「行動」の変化が「態度」の変化を招いたり、「態度」の変化が直接「学習観」の変化をもたらしたりすることもある。2)「学習観」を変化させる外的要因として、特に成人の学習者にとってはマスメディアの影響が大きい。どのだけの情報を取り入れて選択できるかは個々の経験と能力による。多くの場合自分に与えられた、限られた情報を無批判で受け入れることにより自らの「学習観」が形成されて行き、後まで気が付かない例が多い。以上の2点が浮き彫りにされた。したがって、外国語教育においては、学習者に自らの外国語学習を定期的に振り返る機会を与えるとともに、それぞれの時点で利用可能な情報源を把握し、最大限に利用できるような環境づくりが必要だろう。

本研究はインタビューデータの質的分析結果をもとに「学習観」と「パブリック・ディスコース」との関係性を明らかにしていった。その過程でそれぞれの学習者の長年にわたる「学習観の変化」を1つのストーリーとして捉え、それを単にインタビューを書き起こしたテキストとして分析をするのではなく、それぞれのストーリーがどこで、なぜ、どのようにおこり、それぞれの場面でどのような働きをするのかということを経験から分析することにより、外国語学習と社会的要因の関係を学習観の変化を中心に解明することができる。本研究のインタビューデータについてもナラティブ研究の枠組で今回の分析対象にしなかった各発達段階における、親、友人、教師の影響力や、学習観の変化を促す外的要因の詳細などについて、さらに深く分析を行うことが可能であると思われる。

#### <引用文献>

- Amuzie, G. L. and P. Winke. (2009). "Changes in Language Learning Beliefs as a Result of Study Abroad." *System*, 37: 366-379.
- Brown, H. D. (1987). *Principles of Language Learning and Teaching*. 2<sup>nd</sup> ed. Englewood Cliffs, NJ, USA: Prentice Hall
- Dyrberg, T. B. (1997). *The circular structure of power: Politics, identity, community*. London: Verso.
- Mercer, S. (2011). *Towards an Understanding of Language Learner Self-Concept*. Dordrecht, The Netherlands: Springer.
- Navarro, D. and Thornton, K. (2011) "Investigating the Relationship between

Beliefs and Action in Self-directed Language Learning.” *System*. 39:290-301.

Neuman, R., M. R. Just and A. N. Criger. (1992) *Common Knowledge: News and the Construction of Political Meaning*. Chicago: University of Chicago Press.

Oda, M. (2014). “Reconditioning the Condition for Second Language Learning.” In *Conditions for English Language Teaching and Learning in Asia*. Edited by K. Sung and B. Spolsky., 115-125. New Castle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.

Peng, Jian-E. (2011). “Changes in Language Learning Beliefs during a Transition to Tertiary Study: The Mediation of Classroom Affordance.” *System*. 39:312-324.

Spolsky, B. (1989). *Conditions for Second Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.

Van Dijk, T. A. (1996). Discourse, Power and Access. In *Texts and Practices: Readings in Critical Discourse Analysis*. Edited by Carmen Rosa Caldas-Courthard, and M. Courthard, 84-104. London: Routledge.

Yang, Jin-Suk., and Kim, Tae-Young. (2011) “Sociocultural Analysis of Second Language Learner Beliefs: A Qualitative Case Study of Two Study-abroad ESL Learners.” *System*, 39: 325-334.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Oda, Masaki. (2014) “Learner Beliefs and Learning of English as a Lingua Franca” *Proceedings for Language in the Online & Offline World 4: The Latitude*. Surabaya, Indonesia: Petra Christian University. 118-122. 査読有

[学会発表](計18件)

Oda, Masaki. “A Journey to become an applied linguist: Disciplinary Knowledge and Professional Development” 香港中文大学英語学部 Research Seminar、平成 28 年 2 月 26 日、中国、香港、香港中文大学。

Oda, Masaki. “Displacing NES-NNES Dichotomy in ELT” TESOL Regional

Conference, 平成 27 年 12 月 3 日、シンガポール、国立教育学院。

Oda, Masaki. and Toh, Glenn. “Assaying and Extrapolating from the Challenges of Launching an ELF Program” in The 13th International Asia TEFL Conference, 平成 27 年 11 月 6 日、中華人民共和国、南京市、南京ユースオリンピック国際会議場。

Oda, Masaki. “The Discourses of proper assessments in ELT: How can teachers deal with them critically?” The 62nd TEFLIN International Conference. 平成 27 年 9 月 15 日、インドネシア、デンパサール市、サヌールパラダイスプラザホテル。

Oda, Masaki. “Native speakers and the learning of English at Japanese Universities”、第 54 回大学英語教育学会国際大会、平成 27 年 8 月 28 日、鹿児島県、鹿児島市、鹿児島大学。

小田真幸、「グローバル化時代の大学英語教育 - EFL 環境下での日本の英語教育は如何にあるべきか - 」大学英語教育学会九州・沖縄支部 第 150 回東アジア英語教育研究会記念研究会、平成 27 年 2 月 21 日、福岡県、福岡市、西南学院大学。

Oda, Masaki. “Language Awareness and teaching English as an International Language: A case of a Japanese University” 20th International Conference of International association of World Englishes、平成 26 年 12 月 19 日、インド、ニューデリー、アミティー大学。

Oda, Masaki. “University English Language programs in Transition: EFL to ELF, then?” 第 4 回早稲田 ELF 国際ワークショップ、平成 26 年 11 月 15 日、東京都、新宿区、早稲田大学。

Oda, Masaki. “Never Ending Journey: Beliefs about Language Learning and Teaching” ベンクル大学国際セミナー、平成 26 年 10 月 11 日、インドネシア、ベンクル市、ベンクル大学。

Oda, Masaki. “From Native Speaker models to EIL/ELF: Shifting paradigm of university ELT programs in Asia” The 61st TEFLIN International Conference. 平成 26 年 10 月 8 日、インドネシア、ソロ市、ローインホテル。

Oda, Masaki. “The Evolution of ‘proper’ ELT in Asia: A Diachronic Approach” The 12th International Asia

TEFL Conference、平成 26 年 8 月 28 日、マレーシア、クチン市、ボルネオコンベンションセンター。

Oda, Masaki. “Demythicalizing ‘native speakers’: A Challenge in ELT at Japanese University” KATE 2014 International Conference、平成 26 年 7 月 4 日、大韓民国、ソウル市、ソウル国立大学。

Oda, Masaki. “Politically Correct English Language Program for Japanese Universities?” 日本「アジア英語」学会第 34 回全国大会、平成 26 年 6 月 28 日、京都府京都市、京都外国語大学

Oda, Masaki. “Native Speaker Models or World Englishes?: Developing an English Language Program for a Japanese University” The 19th Conference of the International Association for World Englishes (IAWE 2013)、平成 25 年 11 月 18 日、アメリカ合衆国アリゾナ州テンピ、アリゾナ州立大学。

Oda, Masaki. “Reconditioning the conditions for Second Language Learning: Social Conditions and Learner Motivation” The 11th International Asia TEFL Conference. 平成 25 年 10 月 27 日、フィリピン共和国、マニラ、アテネオ デ マニラ大学。

Oda, Masaki. “Learners’ beliefs and ‘Common knowledge’ about learning English” 第 52 回大学英語教育学会国際大会、平成 25 年 8 月 30 日、京都府京都市、京都大学。

Oda, Masaki. “EFL Programs for Asian Universities in the Era of Globalization: The role of ELT professionals” The 60th TEFLIN International Conference、平成 25 年 8 月 29 日、インドネシア、ポゴール、インドネシア大学。

小田眞幸、「外国語（英語）学習をめぐる「共通知識」：言語教育政策と学習観への影響」大学英語教育学会九州沖縄支部 第 131 回 東アジア英語教育研究会、平成 25 年 5 月 18 日、福岡県、福岡市、西南学院大学。

〔図書〕(計 2 件)

Oda, Masaki. (2015) “The Discourses of ‘Proper’ Assessments in ELT: How Can Teachers Deal with Them Critically” *Developing Indigenous Models of English Language Teaching and Assessment*. Edited by Fuad Abdul Hamied, et al. 191-202. TEFLIN.

Oda, Masaki. (2014). “Reconditioning the Condition for Second Language Learning.” *Conditions for English Language Teaching and Learning in Asia*. Edited by K, Sung and B. Spolsky., 105-126. Cambridge Scholars Publishing.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小田 眞幸 (ODA, Masaki)

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：60224242